

近世金沢の書肆の絵図出版

深井 甚三

Pictorial map publication of a publishing house in Edo period Kanazawa（金沢）

Jinzo FUKAI

キーワード：江戸時代，絵図，出版，書肆，金沢

keywords：Edo period, Pictorial map, Publication, Publishing house, Kanazawa

はじめに

近世の三都や城下町その他の都市における書肆による出版についての研究は盛んになっているが、城下町の書肆の場合、書籍と異なりその絵図出版の研究という点で個別の実証的成果はみられない⁽¹⁾。ただ、近世の刊行絵図の全体的な観察から、その特徴として、幕府直轄都市と異なって、城下町などでは藩が規制して都市絵図を刊行させなかったこと、またそれに加え城下町を初めとする地方都市の出版では社寺参詣・名所遊覧の案内図としての性格の町図や温泉地の図が多いこと、さらに近世の刊行地図一般の特色として街道図・海路図の出版が盛んであったことも併せて指摘されている⁽²⁾。

地方出版は高野山や伊勢など畿内の門前町で早くに行われるようになったが、城下町でも水戸や仙台が早くに、これに若干遅れて天和以降に金沢なども書肆の活動が活発になったことが指摘されている⁽³⁾。城下町による出版物の調査では、名古屋における書肆の出版物が掘り起こされ、また松本など城下町も含む信州国内の書肆の出版物も丹念に調査されている⁽⁴⁾。金沢でも竹松幸香氏により調査が実施され、書肆刊行書のリストが作成され、それは『金沢市史』編纂の中でさらに補充調査されて充実したものとなっている⁽⁵⁾。もちろん、残された課題もある。そのリストや研究が書物対象となっており、一枚刷りの刷物などは今後の課題となっていることである。地方出版の中で重要な位置を持ったとされる、寺社案内図・寺社境内図は当然に上のリストには載らないし、道中図も折本仕立など以外の一枚刷りも対象外となるなど、一般の書物と異なり絵図類には上リストから漏れるものが出ることになる。このため一枚刷り

も含めて金沢書肆の刊行絵図について調べ、近世金沢の出版絵図のリストを作成し、本稿末に掲載した⁽⁶⁾。

本稿では、具体的な研究のみられない城下町の書肆による絵図出版についてこの金沢の書肆を取り上げ、このリストをもとに、絵図出版の実態とその特徴を明らかにすることにした。とりわけ刊行絵図の中心となっていたのが、前記のように藩の規制により刊行される絵図の場合は、交通や旅にかかわる道中図や寺社案内図が多くなるために、金沢では書肆が出版したこの道中図に特に留意して本稿では検討することになる。なお、先に金沢の書物の研究で他の城下町との比較が試みられたので、金沢の絵図出版でもその特徴を確認する必要があるため、最後に他の城下町の書肆による絵図出版との比較も行いたい。このため前記のように調査の行われている名古屋や信州の中小城下町の事例を比較事例とするが、金沢藩支藩の富山については刷物などその出版物を多数所持している富山郷土博物館の絵図について詳しい目録が作成され、また絵図に関連した一枚刷りの出版物についての研究も進んでいるので、富山もこれに加えたい⁽⁷⁾。

一、金沢の刊行絵図と書肆

近世の金沢にて出版された絵図や絵図に類似する一枚刷りの絵画の刷物についてまず初めに取りあげたい。絵図や名所図・景観図、景観描写を行う双六をはじめとする絵図類似の絵画のうち書肆による刊行が判明するものとそうでないものに区分して論文末に一覧表にしてまとめた。書肆刊行が確認できたもので、その書肆の出版活動期と内容による分類も

加え、他の情報は簡略にして示すと次の表1の通りである。

表1、金沢書肆の刊行絵図

- 1、(元禄15年以前)「(金沢ヨリ伊勢大和廻り之図)」三箇屋五郎兵衛〔元禄一寛政期〕折畳一枚刷り〔道中図〕
- 2、元禄15年、「金沢ヨリ伊勢大和廻り之図 高野和歌浦須磨明石播州名所京都へ東西近江路之図」三箇屋五郎兵衛、折畳一枚刷り〔道中図〕
- 3、宝永5年「従加州金沢至武州江戸道中記」三箇屋五郎兵衛、折本〔道中図〕
- 4、正徳2年、「従加州金沢至武州江戸下通山川駅路之図」三箇屋五郎兵衛、折本、〔道中図〕
- 5、(正徳5年以前)「金沢ヨリ中仙道東海道図」三箇屋五郎兵衛〔道中図〕(未発見、「六葉集」より)
- 6、(正徳5年以前)「立山禪定之図」、三箇屋五郎兵衛、〔寺社案内図〕(未発見、「六葉集」より)
- 7、(享保4年以前)「金沢ヨリ伊勢大和廻り之図 高野和歌浦須磨明石播州名所京都へ東西近江路之図」、三箇屋五郎兵衛、折畳一枚刷り〔道中図〕
- 8、享保4年「新改正 金沢ヨリ伊勢大和廻り之図 高野和歌浦須磨明石播州名所京都へ東西近江路之図」、三箇屋五郎兵衛、折畳一枚刷り〔道中図〕
- 9、未詳「新板江戸道中細見図」塩屋与三兵衛、折本〔道中図〕
- 10、未詳、「従金沢至江戸道中駅路山川之図」、八尾屋喜兵衛、折本、〔道中図〕
- 11、未詳、「金沢江戸間道中図」能登屋次右衛門、折本〔道中図〕
- 12、嘉永元年「金沢西御坊御遷仏掾儀略図」弘所上堤町松浦善助・八兵衛、他2名、一枚〔寺社行事案内図〕
- 13、安政6年、「金城北国往還道中図」、石田太左衛門、折本〔道中図〕
- 14、(慶応3年)「東新地絵図」近廣堂、一枚刷り〔遊所図〕

この表により金沢の本屋が出していた絵図はほとんどが道中図であったことがわかる。旅案内のために街道とその沿道の寺社・名所旧跡などを紹介した絵図である。例外的に寺社案内図や遊所図がある。寺社案内図としたのは6「立山禪定之図」であるが、これは立山の宿坊である衆徒が出していた立山参詣の名所図を元図にしたものとみられる⁽⁸⁾。12嘉永元年「金沢西御坊御遷仏掾儀略図」もあるが、これは真宗寺院の行事案内図であり、一種の寺社案内図でもある。このほか14「東新地絵図」もあるが、これは遊所の宣伝図である。

金沢の町方図と金沢町内の名所図など案内図は需

要が多くない。これらを必要とするような他国者など金沢を通行する旅人も時代と共に増えるが、上方の寺社や伊勢への参詣者が寺社参詣旅人の場合の主であり、彼らがわざわざ金沢の寺社に立ち寄るために金沢を訪れるということはあまりない。また、金沢内に他国の旅人を大きく引きつける特別な所は金沢城以外にあまりなく、また城下内に温泉もない。武家の通行も参勤交代で往来するような藩は支藩以外ほとんどない。こうして金沢の書肆が出版する寺社案内図や名所案内図は少ないものとなった。三箇(三ヶ)屋は金沢外のしかも越中の立山参詣のための案内図を出しているが、これは地元の人々の需要に加え、立山参詣のために来訪する旅人を当てにした出版とみられる。しかし、立山と並ぶ山岳信仰の白山禪定の絵図は金沢の書肆により出版されていない。金沢の書肆が出版した絵図は道中図を主としたものとなった。

次ぎに金沢の本屋が出版したか不明であるが、金沢にかかわりのある木版刷りの絵図や絵図に類似する景観などを取りあげた刷物を、分類も加えて改めて示すと表2のものが知られる。

表2、金沢関係刷物の絵図および景観図

- 15、文化12年「加賀国河内庄鳳凰山形勝図」津田鳳卿探勝・金子斐(有斐)絵、一枚り〔名所風景画〕
- 16、安政5年「駅路之鈴」遠藤数馬、取次鳶虎右衛門・御印版木師本郷三街目中澤與兵衛 折本〔道中図〕
- 17、元治2年「金沢御坊一切経入藏式略図」板元不詳、一枚刷り〔寺社行事案内図〕
- 18、慶応3年「西新地絵図」応需□游、板元不詳、一枚刷り〔遊所図〕
- 19①不詳〔金沢・大坂間道中図〕扇面、片町炭屋与吉、一枚刷り〔道中図〕
②不詳〔金沢・江戸間下通道中図〕扇面、片町炭屋与吉、一枚刷り〔道中図〕
- 20、不詳「犀川河上新町芝居座絵図」板元不詳、一枚刷り〔遊所図〕
- 21、不詳「新板手擲清水参并白山詣双六」板元不詳、一枚刷り〔道中双六〕
- 22、不詳「加州大乘寺之絵図」板元不詳、一枚刷り〔寺社案内図〕

これらの中には書肆が出したものもあるかもしれないが、この点明確になるものはない。上のうち道中図の16安政5年「駅路之鈴」は取次として鳶虎右衛門と江戸本郷の御印判木師中沢与兵衛が記載されている。取次の鳶と江戸の版木師が作成と販売を

請け負っているが、鳶は取次であり、鳶職が本職の可能性もあり、さらに彼が金沢の者と断定しにくいところもある。

年紀の判明するものは文化以降のわずか4点にすぎない。しかもここに取りあげた寺社案内図の中には、双六の21「新板手擲清水参并白山詣双六」や22「加州大乘寺之絵図」のように明治の刊行の可能性があり、参考のためにともに取りあげた。

最も早く文化年間に出された15「加賀国河内庄鳳凰山形勝図」は、名所（名勝）図であるが、作者の津田は文化元年（1804）に藩校明倫堂の助教より御馬廻りに転じた藩士で、写した金子有斐は八家今枝家の儒者であった⁽⁹⁾。残念ながら誰が刷ったものかは不明であるが、作者から見て金沢の本屋や刷師であろう。なお、名所図ともいえる広重の浮世絵の「金城八勝」も存在する⁽¹⁰⁾。これは美しい作品であり、金沢の書肆が刊行したものといえるか検討の余地がある。

寺社案内図はよく知られているように、早くから鎌倉などの寺社で板行され、旅人が増大した近世後期には数多くの寺社で版行されていた。しかし、金沢のものはごくわずかししか知られない。金沢の寺社は他領他国の者がわざわざ参拝のために訪れることは少ないのでこのような結果となったとみられる。しかも先に取りあげた11「金沢西御坊御遷仏掾儀略図」とともに17「金沢御坊一切経入蔵式略図」は、一般の参拝者や旅人相手の寺社案内図とも異なり、ともに寺社の特別な行事を案内するために作成したもので、その対象は金沢町人や近隣の人々とみてよいものである。

慶応期に出されたことがわかる遊所図の18「西新地絵図」は、袋上書に吉田屋の名前が入れられ、「此度遊所御取立ニ付私方まで御出ましのほどを願あけ」との記載がある。つまり吉田屋は本屋ではな

く、遊所の茶屋の一軒ということになる。つまりこれは吉田屋の宣伝用の絵図ということになる。遊所類似の芝居小屋の刷物もある。これは後期に許された芝居座の20「犀川河上新町芝居座絵図」である。

双六も出されていた。21「新板手擲清水参并白山詣双六」があるが、これは金沢の者が刷ったとみられる。これに対して、今までよく知られている金沢にかかわる双六の「新板金沢道中双六」「新改版江戸上下道中双六」⁽¹¹⁾は江戸で出されたものである。

扇子に仕立てられた刷物の道中図19①②もある。この扇子は旅先の利用や、旅情を楽しむために作成、販売されたものである。扇面には金沢片町炭屋与吉と記載されている。これまで金沢の書肆で炭屋は知られていないので、扇子扱いの商人という可能性がある。

二、出版時期と書肆

最初に金沢の書肆が出した絵図は、1「金沢ヨリ伊勢大和廻り之図」(写真1)ではないかと考えられる。これは金沢から伊勢・京都方面へ向かう主要街道の北陸街道から伊勢・大和へ向かう街道を描写している。この絵図は左端が途中で切れている。この左端の下部は外宮であり、肝心の内宮の部分がないので、左側の部分が切れていることがわかる。

この絵図は元禄15年（1702）に刊行された2「金沢ヨリ伊勢大和廻り之図 高野和歌浦須磨明石播州名所京都へ東西近江路之図」(写真2)と図の



写真1. 「金沢ヨリ伊勢大和廻り之図」

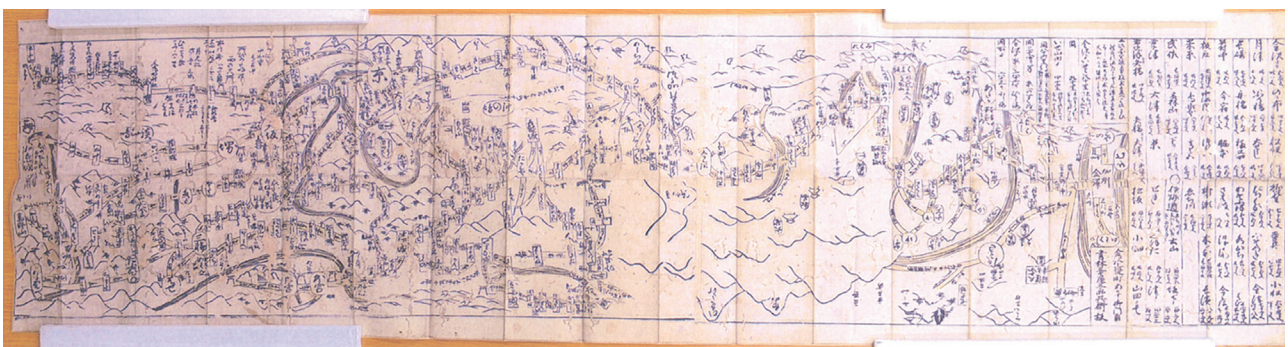


写真2. 「金沢ヨリ伊勢大和廻り之図 高野和歌浦須磨明石播州名所京都へ東西近江路之図」

描写方式や内容もほぼ同じ道中図である。異なる所は1図が左端が切れているので、その部分がないことと、1番の絵図より2番の絵図の内容が若干詳しくなっていることである。すなわち、1は金沢近辺の那谷寺や鶴来などを結ぶ道を細い線で描くものの、2番絵図はこれらの道を太くし、前者には粟津の湯を加え、後者の鶴来の道はさらに白山への禅定道を描くなど寺社名所旧跡とそこへの道などの記載が若干委しくなっている。また、2番絵図は山や海・湖の描写も丁寧になっている。つまり、1番の簡略な絵図に対して、2番絵図では丁寧で若干詳細なものに改められている。また、版元の記載も1番は「堤町不開御門角板本三箇屋五郎兵衛」と冒頭下部に刷っているが、2番絵図は次のように記載されている。

元禄十五新板海陸大成

堤町不開御門角板本三箇屋五郎兵衛

上のようにわざわざ「新板海陸大成」と記しており、これまでの版と異なることを明示している。以上の点から、1「金沢ヨリ伊勢大和廻り之図」は2番絵図の元禄15年(1702)よりも前に出されたものといえる。金沢では延宝期から書肆の出版が始まっているが、両道中図を出した三箇屋の出版物の初出は元禄4年「卯辰集」であった⁽¹²⁾。このため1の道中図は元禄時代のものとみるのが妥当となる。

このように金沢の書肆では元禄15年よりも前の元禄期に道中図を出版していた。もちろん、金沢の書肆よりも早くに三都の本屋からは道中図が刊行されている。東海道路では寛文6(1666)、7年の「東海道路行図」や同12年「東西海陸之図」などの絵図が寛文期より刊行され、元禄3年には東海道分間絵図も出されていた。また、広域を描く道中図としては、初版がいつ出されたか不明であるが、「道中独案内図」の刊行があり、その後天和3年「諸国道中大絵図」⁽¹³⁾が出されていた。

1番・2番の絵図は横長の一枚刷りの絵図なので、折りたたんで旅に持参できる絵図である。表題のように伊勢への旅や大和・高野山など寺社名所への旅に必要な道中情報として作成されたものである。加賀藩領でも元禄に先立つ寛文・延宝期には、藩が参宮への規制をするなど、元禄時代は伊勢参りと西国の寺社参詣が盛んとなっていた⁽¹⁴⁾。また、藩士の場合は京都や大坂への公用による旅の必要もあり、こうした需要から元禄時代に本絵図の刊行をみるこ

とになったわけである。

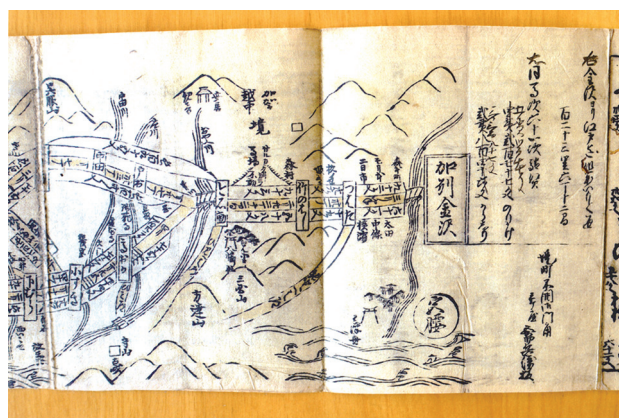


写真3.「従加州金沢至武州江戸道中記」



写真4.「従加州金沢至武州江戸下通山川駅路之図」

この絵図を初めに以後、三箇屋五郎兵衛が多数の絵図を刊行することになる。3番目に刊行した絵図は3宝永5年「従加州金沢至武州江戸道中記」(写真3)である。題名に道中記と付けられているが、これは金沢と江戸間の北陸街道(北陸道)・北国街道・中山道、つまり加賀藩領では下通や下街道と呼ばれた街道の絵図である。

上の絵図に続いて同じ下通の絵図「従加州金沢至武州江戸下通山川駅路之図」が正徳2年(1712)に刊行された(写真4)。これは金沢藩の兵学者有沢永貞(梧井庵)の描いた絵図をもとにしたものである。そして、同じ正徳5年に三箇屋から刊行された「六用集」(金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)では「伊勢京大和廻り高野和歌浦須磨明石播州名所道図」とともに「北陸道江戸道中図」「金沢ヨリ中仙道東海道図」そして「立山禅定之図」が宣伝されている。「伊勢京大和廻り高野和歌浦須磨明石播州名所道図」は2の元禄15年「金沢ヨリ伊勢大和廻り之図 高野和歌浦須磨明石播州名所京都へ東西近江路之図」か7「金沢ヨリ伊勢大和廻り之図 高野

和歌浦須磨明石播州名所京都へ東西近江路之図」のこととみられる。「金沢ヨリ中仙道東海道図」は残念ながら現存していない。この絵図は表題に中山道の文言が入るが、これは北陸街道から東海道へ回る間に中山道も利用するというので、実質は上通りの東海道廻りの道中図のことである。最後の「立山禪定之図」は、この図を写したとみられる絵図が内閣文庫に現存する⁽¹⁵⁾。この時期には立山参詣も盛んとなっており、これに対応した出版を三箇屋は試みたということになる。

その後の享保4年(1719)には、三箇屋が最初に出した1「金沢ヨリ伊勢大和廻り之図」の改訂版が出版されている。同絵図の需要がこの時期には一段と高まっていたので、新版を出したことになる。以上のように元禄から享保期にかけて一段と寺社参詣や公用旅が盛んになっていったために、これにあわせて三箇屋は三都と異なる地方出版業者にもかかわらず、旺盛な絵図出版を道中図を対象に展開したわけである。

三箇屋の出版絵図は三都の書肆との相仕共同による出版となっていないのも大きな特徴である。しかし、三箇屋が相仕の出版をしていなかったわけではない。同家の出版初出の元禄4年「西の雲」より宝永元年「干綱集」までの書物はみな京都の井筒屋庄兵衛や平野屋庄兵衛との相仕による刊行であった。単独出版が行われたのは俳書「艶賀の松」が出された宝永5年であった⁽¹⁶⁾。

これらの絵図は金沢を基点にすることになる。このため需要が金沢藩領にほぼ限られるので、三都の書肆がわざわざこれらの絵図と一緒に刊行するということは考えられない。ただし、江戸始発の金沢への絵図は江戸の本屋が金沢藩士らを対象に販売に乗り出している。すなわち、元禄8年「従武州江戸至加州金沢道中記」(湯島天神前吉野屋孫三郎板、石川県立図書館森田文庫蔵)のような道中図が出されている。この場合は江戸から金沢への絵図を彼らが作成して、江戸詰め金沢藩士に加え、江戸町人など北国筋に向かう人や、関心のある人々を購買対象にして販売に乗り出せるのである。

さて、三箇屋の刊行物が知られるのは元禄より元文の期間のことであったが、没落したのは寛政期といわれている⁽¹⁷⁾。その若干前の安永4年(1775)に金沢を訪れた高山彦九郎は書林三箇屋に立ち寄り⁽¹⁸⁾、元文以後も営業をつづけていたことは

確認できる。三箇屋からは元文までの間に8点もの絵図が道中図を主にして出されていた。そもそもこの期間に金沢で出版活動をしたのは同家以外には麿屋五郎兵衛・升屋伝六・塚本半兵衛・塚本治兵衛・板木師半六が他に知られるだけで⁽¹⁹⁾、しかもこれらの書肆は現存する出版物がそれぞれ一点のみという状態であり、元禄より元文期という、城下町金沢の出版事業の草創期は三箇屋により担われたものである。しかもこれらの家は絵図は出しておらず、金沢の絵図出版はいわば三箇屋の独占的な事業となっていた。

もっとも三箇屋は絵図だけを出版していたわけではない。絵図以外では多くの俳書に加え、茶道関係の「茶之湯奥儀集」、暦の「袖中暦」その他多様な書物の出版をしていたことも紹介されている⁽²⁰⁾。なお、同家は上堤町にあり、北陸街道の繁華な町並に位置し、旅人への本の売買も可能な店であった。

三箇屋が出版業界から消えてからは絵図を複数刊行する本屋はみられなくなってしまった。しかも三箇屋後に絵図出版がみられるのは、元文から大部経過した享和ないし寛政より天保期に活動したことが判明する、塩屋与三兵衛と八尾屋喜兵衛による出版であった⁽²¹⁾。塩屋は寛政8年(1796)から天保7年(1836)の間の出版活動が確認できる本屋である。同家の絵図は刊年不詳の9「新板江戸道中細見図」(写真5)である。これも相仕ではない刊行物である。同家の書物は寛政8年「広沢和文章訳文」・文化14年「韓非子解詁全書」、文政2年「算学鉤致」、天保7年「渡海標的」の刊行が知られる⁽²²⁾。算学・測量学関係の、しかも加賀藩領内の代表的な暦算家・測量家である石黒信由の書籍出版を行っていた。こうした関係から道中図も出したのであろう。しかし、彼や他の算学者・測量家の作成絵図の出版というこ

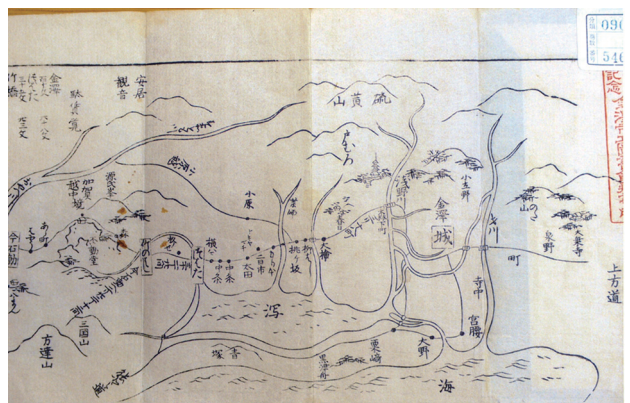


写真5.「新板江戸道中細見図」

とはなかった。彼の居住したのは観音町であり、金沢城の防衛線ともなる浅野川のすぐ外で、北陸街道を分岐した町筋にある町で、この地域の寺社参詣者はもちろん、北陸街道を通る旅人も立ち寄れるような町にあった。

八尾屋喜兵衛は文化2年「御和算（賛）」より安政5年「五海道中記」まで多くの書物を出しているが⁽²³⁾、絵図は10・年不詳「従金沢至江戸道中駅路山川之図」のみであった。書物には京都の相仕での刊行が知られるが、これは同家独自の出版であった。同家では道中記・名所案内の天保15年「廿四輩御旧跡道しるべ」・安政5年「五海道中記」・年不詳「道中案内細見記」を出しており、彼の場合もこうした出版への関心からの道中図刊行といえよう。八尾屋は堤町にあり、三箇屋と同じ町で、北陸道筋の繁華な町にあり、旅人の購買も予定できる位置にあった。

塩屋・八尾屋の活動までに50年以上もの期間が経過していた。この間には金沢などの武家・町人の旅は徐々に増大しており、とりわけ藩士の江戸への往来による下通の旅案内書や絵図の需要も高まっていたとみられる。しかし、三箇屋に代わる本屋による道中図出版はみられなかったのである。ところがこの下通の手書き絵図や絵巻がかなり現存している。この手書き道中図でも永貞の4「従加州金沢至武州江戸下通山川駅路之図」をそのまま写して巻物に仕立てたものも金沢市立玉川図書館近世史料館その他にみられる⁽²⁴⁾。こうした本屋の下通絵図の刊行が途切れたことが手書きの下通の絵図・絵巻を生み出していくことになったと考えられる。

幕末の安政6年には13「金城北国往還道中図」が石田太左衛門により出された。この絵図も石田だけで出しており、相仕関係はない。石田は慶応元年に「養蚕摘要」という書物を出版している、幕末金沢の書肆である⁽²⁵⁾。

この幕末に14「東新地絵図」も出されているが、これを出したのは近廣堂であった。近廣堂は同じ幕末の安政2年に俳書「ともぶえ集」「俳諧双葉集」を出し、その後も俳書「今人発句百家集」を刊行し、さらに遊郭細見書の「新両地細見」を出版していた⁽²⁶⁾。この絵も同細見とともに刊行されたものということになる。近廣堂は近江町の彫工版木刷物師でもあったことが指摘されている⁽²⁷⁾。近江町は魚市場で著名な所であるが、金沢町方の中心、尾張町

に近く、北陸街道に結んでいる町である。

刊行年不詳の道中図が能登屋次右衛門により出版されているが、この絵図は下通の道中図である。しかもほぼ有沢永貞の絵図を写したものであり、相仕とは無関係となる。同絵図の尾末には最後に名前脇に書林安江町の記載があり、書林としている以上、他にも出版物は有ったのであろうが、現在は他の出版物は不明である。なお、前記したように安永4年(1775)に高山彦九郎が金沢を訪れた際には、この安江町にあるのとや次介に寄り、「下道の記をととのひ諸州めくりの書はここにて払也」と記載する⁽²⁸⁾。町と屋号からみて次右衛門は次介の子孫となる者であろう。当時の本屋は書物の売却だけではなく、客から書物を買入れもすることがわかる。安江町は北陸街道から若干外れるが、金沢御坊に近い町で、参詣者も往来し賑わいのある町でもあった。

三、道中図の形態と対象街道

金沢の本屋により出版された道中図の形態とその対象街道を整理すると表3のようになる。

表3、刊行道中図の形態と街道

- | |
|--|
| 1、(元禄15年以前)「(金沢ヨリ伊勢大和廻り之図)」三箇屋五郎兵衛刊、折畳一枚刷り(31×72 糎)……<伊勢・大和廻り道中> |
| 2、元禄15年「金沢ヨリ伊勢大和廻り之図 高野和歌浦須磨明石播州名所京都へ東西近江路之図」三箇屋五郎兵衛、折畳一枚刷り(30×120糎)……<伊勢大和廻り道中> |
| 3、宝永5年「従加州金沢至武州江戸道中記」三箇屋五郎兵衛、折本(16×13糎)……<下通> |
| 4、正徳2年「従加州金沢至武州江戸下通山川駅路之図」三箇屋五郎兵衛、折本(21×10糎)……<下通> |
| 5、(正徳5年以前)「金沢ヨリ中仙道東海道図」三箇屋五郎兵衛(未発見)……<上通東海道> |
| 7、(享保4年以前)「金沢ヨリ伊勢大和廻り之図 高野和歌浦須磨明石播州名所京都へ東西近江路之図(北国道中図)」三箇屋五郎兵衛、折畳一枚刷り(30×116糎)……<伊勢大和廻り道中> |
| 8、享保4年「新改正 金沢ヨリ伊勢大和廻り之図 高野和歌浦須磨明石播州名所京都へ東西近江路之図」三箇屋五郎兵衛、折畳一枚刷り(29×119糎)……<伊勢大和廻り道中> |
| 9、不詳「新板江戸道中細見図」塩屋与三兵衛、折本(19×8 糎)・・・<下通> |
| 10、不詳、「従金沢至江戸道中駅路山川之図」八尾屋喜兵衛、折本(15.5×6.6糎)……<下通> |
| 11、不詳、「金沢江戸間道中図」能登屋次右衛門、折本(不明)……<下通> |
| 13、安政6年「金城北国往還道中図」石田太左衛門、折本(16×8 糎)……<下通> |

上のように多くが折本仕立てであった。しかし、当初からそのような道中図が出されたのではなく、初めは一枚刷りの道中図として作成されたものである。これは一枚刷りの絵図を横にいくつにも折り畳み、さらに縦を上下半分に折り畳む絵図であり、当然に旅に持参できるものであった。正徳2年(1712)の4有沢永貞作「従加州金沢至武州江戸下通山川駅路之図」から折本の道中図が現れるが、これは縦21幅、横10幅の本であり、旅に携帯できる大きさの道中図である。そして、この絵図以降、金沢の書肆が刊行した折本の道中図もみな携帯可能なものとなっていた。

永貞の師、遠近道印が出版して大変な評価を得た元禄3年「東海道分間絵図」(国会図書館蔵他)は携帯するには大きく、鑑賞用的要素があった。「東海道分間絵図」が携帯用の折本仕立てとなるのは、その改訂版の宝暦2年「新板東海道分間絵図」になってからであった⁽²⁹⁾。つまり、三箇屋から刊行された永貞の道中図は、道中図としては早くに携帯性のあるものとして出版されたのである。このような実用性がなければ、江戸などと異なり需要の少ない金沢で出版することは難しかったろうし、また、このような工夫が同絵図の多数の残存や、その写の多数の作成をもたらしたのであろう。

金沢の書肆が出した道中図の対象とする街道は次のようになっている。

- a, 伊勢大和廻り道中……1(元禄15年以前), 2(元禄15年), 7(享保4年以前), 8(享保4年)
- b, 下通………3(宝永5年)・4(正徳2年)・9(不詳)・10(不詳)・11(不詳)・13(安政6年)
- c, 上通東海道………5(正徳5年以前)

aの伊勢大和廻り道中は、金沢から北陸街道の上道中を利用して伊勢や大和など西国の霊場や名所旧跡へ向かう、これらの寺社・名所旧跡を回る街道の絵図である。この絵図は元禄15年以前から数多く作成されていた。

この絵図に対して、江戸へ向かう道中の絵図も作られた。金沢から江戸へ向かう場合には、北陸街道の上通を利用する場合と下通を利用する場合があった。前者の北陸街道から東海道の進み江戸へ向かう道中図もあったが、この現存するものは東海道廻りの一点のみであるが、未発見の5「金沢ヨリ中山道

東海道図」も三箇屋により刊行されていた。この図は中山道東海道図となっているが、これは北陸街道から一部の中山道を利用して東海道を主として経由するもので、中山道をそのまま利用して江戸へのルートは道中図とは異なる。この上通と反対に北陸街道を越中・信越へ向かう江戸へ出る下通の道中が江戸への主要なルートとなっていた。これはともに金沢藩の参勤交代で利用されたルートであり、距離が短い下通が多く参勤交代や家臣、領民の江戸への行き来に利用されていたので、下通の道中図が数多く作成されていた。つまり、金沢藩土の利用が手堅く得られるので下通の絵図は出されたが、上通利用は少ないので、aの絵図を出した三箇屋も上通利用の中山道廻りによる江戸への道中図は刊行しなかったようである。

金沢・江戸間の道中図でも下通の絵図が多数を占めていた。上通り利用のものは限定されていた。参勤交代では下通利用が主なので、三箇屋が上通の東海道経由の街道絵図を出しても、売れ行きの関係からか中山道廻りの道中図を発売していない。また、以後には書肆が上通の東海道廻りの絵図を出すことはなかった。

四、道中図の作図方式・情報と作者

1、作図方式

道中図が多数作成・刊行されていたわけであるが、これらを作図方式と掲載する情報について整理すると次のようになる。

道中図の描写では方位や縮尺を正確に表現する分間絵図とそうしない見取絵図の二つに分類される。また、絵図だけですべての情報を提示する場合と、絵図に付して道中情報が加えられている方式を採用のものが、さらにその情報の内容も多様となる。

まず、見取絵図をa、分間絵図をbにして整理すると次のようになる。

見取絵図

- ア、伊勢・大和など寺社名所廻りの道中図……1(年未詳)・2(元禄15年)・7(享保4年以前)・8(享保4年)

- イ、下通道中図……3(宝永5年)・10(不詳)
- ウ、上通道中図……5(正徳5年以前)

分間絵図

- エ、下通道中図……4(正徳2年)・9(不詳)・

11 (不詳)・13 (安政 6 年)

伊勢大和廻り図や下通道中図など宝永以前に元版が出された絵図は見取絵図であった。1 の伊勢大和廻りの図は両端が破れてわからなくなっているが、2・7・8 の「金沢ヨリ伊勢大和廻り之図」は両端の南北の方位記載が行われており、1 も同様であったとみられる。これに対して下通の 3 宝永 5 年「從加州金沢至武州江戸道中記」は方位記載も省かれている。

このような見取絵図が出された下通の絵図も、永貞の分間絵図が出されて以来、10を除いてその道中図は分間、縮尺による分間絵図ということになった。そして、これらの縮尺は次の通りである。

- 4, 正徳 2 年版 (三箇屋)・縮尺 1 寸 = 1 里,
9 (塩屋与三兵衛) は同上を下敷きにして作成。11 (能登屋次右衛門) は 9 図を基にしたもの。

- 12, 安政 6 年 (石田太左衛門)。縮尺 1 寸 2 分 = 1 里

これらの道中図は分間絵図といっても、遠近道印の「東海道分間絵図」のように、各所で方位を提示して、街道筋各所での方位を理解できるようにしているものではなかった。分間絵図でありながらこの方位記載を省いているところにこの絵図の特徴があった。街道の両側に展開する風景や地理が方角でどの方向にあるかまで把握できることを目指さずとも、その主要なものの表現と、名前の注記で道中案内としては足りるとするものであった。もちろん、距離も厳密に表現されていなくとも、「東海道分間絵図」と同様に大まかに把握できる程度の分間図として作成されていた。

上通道中東海道廻り図や上通中山道廻り図にも下通と同様に手書き絵図では永貞の師、遠近道印により分間絵図が作成されていた。しかし、下通は永貞が分間絵図を作成して、これを本屋三箇屋に提供したが、彼が上通の絵図を作成したことは知られない。

参勤交代の藩士を初め往来する人の多い下通では、三箇屋が廃絶して以降も若干たってから道中図が出されることになった。その場合に先行の絵図が利用されることになるのは自然であるが、分間絵図として信頼度の高く、古城記載など武家利用者への配慮のある永貞の 4 三箇屋本の分間絵図をもとにした絵図が利用作成されることになった。このため 9 塩屋本や 11 能登屋本のように、ほとんど中身が 4

三箇屋本と同じ物がつくられることになった。しかし、さすがに幕末の安政 6 年 (1859) には、縮尺を替えることを明示して新たな分間絵図が作成されたが、大枠は永貞本に従ったものといえる。これにつき石田は「此道中記ハ幾度の往来に禿筆をとつて記し置をこたび友輩のすゝめにまかせて桜木ニちりはめぬ」と言っており、凡例には「曲尺壹寸二分ヲ以テ壹里トス、山坂屈曲ニ至ッテ少シノ延縮ミモアルヘシ」と記すが、この前には次の事項の記号を記載する。() 内は 4 永貞本の記載の有無である。

城下 (有) 陣屋 (有) 駅々 (有) 村 (有)
名所古蹟字 (無) 古城 (有) 国界 (注記)
神社 (有) 仏閣 (有) 大道 (有、ただし小
道と区別無し) 小路 (有) 舟渡し (有、注
記) 橋 (有) 川々 (有)

永貞本よりも記号を多用しているのが特徴である。また、永貞本では古城記載を重視し、寺社記載も丁寧にするが、名所旧跡はこれらの寺社記載ですむと判断したためか、名所古蹟記載がない。これに対して、石田本は名所旧跡記載を特別に取りあげている。武家にしろ町人にしろ、増大した後期の旅人には名所旧跡の記載は欠かせないものであったために、このような新たな分間絵図が作成されることになったのである。

以上の道中図はみな例外なく右端を始点にして描いている。東から西へ進む、金沢より伊勢・大和への道中図も、下通の金沢より江戸への図のように西から東へ進む図もそのようになっている。

2, 掲載情報

金沢の書肆刊行の道中図に掲載された情報とその表記は後掲表 4 に示した。

これらの道中図は旅案内の絵図であるために、道中の道筋の地理的案内だけではなく、駄賃情報を提供することが大切となった。このために伊勢大和廻り道中図のタイプは、当初より宿駅間の駄賃を一覧表にして絵図に付けていた。1 番の絵図は破れがあるためにこれが確認できないが、この絵図のタイプは絵図内に駄賃記載がないので駄賃表が付けられていたとみてよい。もっとも、このタイプの絵図では始点に同表を置くか後ろに置くか定まっていたわけではない。下通の道中図でも、3 宝永 5 年 (1708) の絵図は、伊勢大和廻り道中図と同じく駄賃表を冒頭に付けていた。そして、この絵図は宿駅間を結ぶ

表 4、掲載情報とその表記

- 1, (元禄15年以前), 「(金沢ヨリ伊勢大和廻り之図)」…… 凡例なし, 駄賃表 (無くなった左端巻末にあったか)・惣里程数一覧 (破れにて記載有無不明), 寺社名所旧跡記載
- 2, 元禄15年, 「金沢ヨリ伊勢大和廻り之図」…… 凡例なし, 駄賃付 (一覧表/左端巻末カ)・惣里程数一覧 (伊勢・京など/右始点肩に), 寺社名所旧跡記載
- 3, 宝永5年「従加州金沢至武州江戸道中記」…… 凡例なし。駄賃一覧表と惣里程数・惣馬継ぎ駄賃額を冒頭に記載, 寺社古城記載あり
- 4, 正徳2年「従加州金沢至武州江戸下通山川駅路之図」…… 凡例左端巻末にあり, 駄賃付け (余白記載), 寺社名所古城記載あり
- 7, (享保4年以前)「金沢ヨリ伊勢大和廻り之図」…… 凡例なし, 駄賃付 (一覧表/右端冒頭に)・惣里程数一覧 (伊勢・京など/冒頭駄賃表の左上に), 寺社名所旧跡記載
- 8, 享保4年「新改正 金沢ヨリ伊勢大和廻り之図」, 凡例なし, 駄賃付 (一覧表/左端巻末に)・惣里程数一覧 (伊勢・京など/冒頭右肩に), 寺社名所旧跡記載
- 9, 不詳「新板江戸道中細見図」…… 凡例なし, 駄賃付 (余白), 寺社記載あり, 古城記載なし
- 10, 不詳, 「従金沢至江戸道中駅路山川之図」…… 凡例なし。上下二分割し, 上半分に駅路間の線の間に距離のみ記載する見取図を掲げ, 下半分に宿駅間の距離・駄賃・寺社, ごく一部に名物も記載。下部最後には日本橋より諸方道程記載。
- 11, 不詳, 「金沢江戸間道中図」…… 凡例なし, 駄賃付 (余白)。右端が冒頭, 金沢始点, 寺社記載あり。古城記載なし。
- 13, 安政6年, 「金城北国往還道中図」, 凡例あり (城下・陣屋・駅々・村・町・名所旧跡・古城・国堺・神社・仏閣・大道・小路・舟渡・橋・川々記載)。冒頭に, 駄賃記載 無し

街道の線内にも駄賃を記載している。

下通の絵図の代表的作品となった4正徳2年(1712)の永貞図は駄賃表は付けず, 絵図余白の要所に駄賃を記載する方式をとっていた。同絵図を継承した他の下通の絵図も同じ駄賃記載方式となった。ただ, 13安政6年「金城北国往還道中図」は, 駄賃記載を省いている。利用者からみて駄賃はあっても良いはずであるが, なぜ省略されたか不明である。幕末の駄賃変更の多さによるものであろうか。

駄賃の目安としても宿駅間の距離は大切であった。この情報は, 絵図内にさまざまな工夫にて記載され

ることになる。伊勢大和廻り道中図の形式では, 宿駅間を結ぶ街道を示す二本線の間に里程を記す方式を採る。金沢から代表的な目的地までの惣里程数は冒頭に記載されている。下通の最初金沢出版図である3宝永5年「従加州金沢至武州江戸道中記」も宿駅間の街道を示す線内に駄賃とともに距離記載が行われている。これに対して駄賃表を付けない永貞の下通の分間絵図は, 街道を二本線にて示さずに, 一本線で記載するため, 宿駅間距離はこの街道線の脇に記載することになった。

駄賃・距離とともに大事なものに, 旅筋の名所旧跡案内もあった。これは初期の道中記でも記載される重要な事項であった。このため最初の伊勢大和廻り道中図でも, 道中筋の主要な寺社記載はもちろん, 名所旧跡も記載されている。那谷寺や山中の湯はもちろんのこと, 細呂木・橘間の「しほこしノ松」の描写と記載などがみられる。しかし, これには古城の記載がないのも特徴である。同形式の絵図はこれ以降, 寺社や名所旧跡記載がより詳しくなるが, 古城記載はみられない。

下通の3宝永5年絵図は寺社記載はあるが, 名所旧跡を丁寧に記すものではない。ただこれは古城記載も行っているのが特徴である。参勤交代路であるこの街道の絵図を利用するのは武家であるために, 彼らの関心に応えるために古城記載をしていたとみてよい。加賀にはないが, 越中では守山古城や天神山古城が記されている。この古城記載は, 永貞の分間絵図では一段と丁寧に行われている。加賀でも松根古城や津幡古城の記載がされている。永貞は有沢流兵学を創始した兵学者であるから当然のことであるが, 彼のこの絵図を踏襲した絵図でも後に刊行された塩屋版の9「新板江戸道中細見図」や能登屋次右衛門版の11「金沢江戸間道中図」となると古城記載を省いている。これは武士が主要な購買者であった時代ではなく, 町人ら庶民の旅人増大という時代の変化に対応したものであった。さらに後の幕末のものとなると, 安政6年13「金城北国往還道中図」は名所旧跡記載に加え, 名物の記載もみられるようになっていた。

3、道中図作者

東海道に続いて早くに分間絵図が登場し, その後も同図が生かされ, 幕末まで金沢の下通絵図として出版されたのは金沢の出版の重要な特徴であった。

早くに登場したのは、道印の弟子である有沢永貞が元禄時代の金沢藩に登場したためであった。

金沢の書肆、三箇屋が出した永貞以前の絵図は、直接の絵図を描いた作者名を記さないものばかりであるが、とりわけ初期のものとなると地元の人間が初めから創案して作成したものではなく、三都で刊行された絵図をそのまま利用して描いたものであったためでもある。

1番・2番の金沢より伊勢大和への道中図は、これに先行する道中図をそのまま利用して、金沢を始点に北国街道の上通に先行図の畿内部分を生かしてまとめた内容のものであった。海野一隆氏が道中図の描法の分類として迷路式としているもので⁽³⁰⁾、街道筋を二本の線で宿駅間に描き、この街道をとにかく紙面内におさまるように描写するものであった。そして、宿駅間の距離はこの街道内に記入し、駄賃は別に表でまとめて図の前後どちらかに配置するものであった。この方式は道中案内図の最も初期の、発行初出年不明の「道中独案内」の現存最古の再版本、明和8年「道中独案内図・再版」（京都菊屋版）や年紀初出の天和3年「諸国道中大絵図」（江戸大伝馬町鱗形屋孫兵衛版）⁽³¹⁾でとられているもので、しかも伊勢大和廻り道中図は描法だけでなく、その描く道中筋の曲がりくねりのあり方が対応し、またその描く全体は「道中案内」や「諸国道中大絵図」に含まれている。「諸国道中大絵図」の右端は塩釜・二本松など、左端が高野・和歌山・姫路で、「道中独案内図」は高野・和歌山・姫路が右端で左端が幸手・石橋（奥州道中）・市振（北陸街道）となっている。つまり天地が逆になっているが、これは販売が前者は江戸の本屋のために駄賃表の始点が東海道の場合は日本橋より、後者は京都の本屋による販売本のために京都から始まる描き方となっているためである。

1・2番の伊勢大和廻り道中図は、右端が金沢、左端は伊勢・大和方面となるので、天和「諸国道中大絵図」をそのまま生かすか、「道中独案内図」を反転させてその関係部分を抜き取り利用して作成されたものとなる。もちろん、金沢を始点とするために、北陸道沿道は若干情報を丁寧に加えるなどの補訂が加えられることになる。つまり加賀であれば、小松・月津間より那谷寺への協道情報も加わることになる。こうした加工により1・2番の絵図、また後に改訂された6・7番の絵図は作成されたもの

である。

3番の下通の絵図も作者不明であるが、これも江戸の湯島天神前吉野屋孫三郎が刊行した「従武州江戸至加州金沢道中記」⁽³²⁾を下敷きにして、ほとんど内容を変えずに刊行したものである。両者は長さの寸法が若干異なるが、両絵図を上下にならべ、しかも両者の向きを反転させると対応する絵図である。

こうして作成された以上の絵図はオリジナルなものではないが、特に伊勢大和廻り道中図のタイプの絵図は、金沢の絵師などがまねして作成したともいいがたい。前記のように三箇屋の書物出版は宝永まで京都の書肆と相仕で出版をしているので⁽³³⁾、京都の書肆に絵図作成も依頼して、出版自体は三箇屋単独で行っていたと理解できるからである。3宝永5年「従加州金沢至武州江戸道中記」もあるいは江戸の吉野屋へ依頼して、出版のみ三箇屋で行ったものかもしれない。

分間絵図の4「従加州金沢至武州江戸下通山川駅路之図」は、これまで記してきたように、遠近道印の弟子有沢永貞の作成になるものであった。彼は甲州流兵学者で独自の有沢流兵学という、金沢藩のその後における兵学の中心となった兵学を創始した人である⁽³⁴⁾。彼の絵図が刊行されて以降、前記のように下通の街道絵図は彼のこの絵図を元にした絵図や、それに改訂を加えた絵図が刊行されただけになった。9番などは当然に永貞図をほぼそのまま踏襲しているので、作者名は出さない。これに対して改訂している13番の絵図は、作者が絵図末に下の刊記を加えている。

此道中記ハ幾度の往来に禿筆をとつて記し置を
こたび友輩のすゝめにまかせて桜木ニちりはめ
ぬ転歴の雅君此誤りも多かりしを告あらハ其闕
を補ふて改正となさん

安政6年正月

石田太左衛門梓

石田太左衛門が幾たびかの下通往来の際に記しておいたものを上梓したという。先記のように彼は石黒千尋「養蚕摘要」（慶応元年刊行）を出している書肆経営者であった。

五、富山・名古屋・信州地域との比較

最後に道中図を主としていた金沢の書肆による絵図出版の特徴を、他の城下町の出版と比較して確認

しておきたい。

1, 富山

富山の出版は初め藩校広徳館により始まり、その後富山の本屋による出版が行われるようになり、本屋は主として俳書や文学書を出していたこと、また一枚物の刷物では売薬商が全国各地の顧客に土産として贈った売薬版画が盛んに摺られたことが指摘されている⁽³⁵⁾。こうした富山では広徳館はもちろん本屋も絵図の出版は知られない。ただし、この売薬版画では藩の御用絵師でもあった松浦守義らが名所絵を初めとする売薬版画を描いているが、これらは書肆とは異なる同版画を扱う富山の彫師や版元が売薬商に卸したものである⁽³⁶⁾。

本稿と直接にかかわる売薬版画以外の江戸期における富山の業者刊行刷物の景観画や絵図となると、前者の場合は次の著名な舟橋の絵が知られるだけである。

作成年不詳「越中神通川船橋図」台嶺画（北尾重政）、板元羽根屋又七、木版色刷（34×47㎝）
富山市郷土博物館蔵

寺社案内図では富山城下には多くの他国の旅人が参詣する寺社はないので、関係するとなると藩外の越中の立山か大岩山日石寺となる。しかし、立山に関しては金沢の三箇屋のように刊行したものはなく、ほとんどが芦峯寺・岩峯寺の宿坊刊行のものである⁽³⁷⁾。江戸末期とみられる、刊行者不明の日石寺の案内図も富山市郷土博物館に複数所蔵されるが、これも富山の書肆などではなく、日石寺関係者が出したものともてよい。

城下町の書肆が刊行する重要な絵図の候補となるのは道中図であった。しかし、富山の書肆が出した道中図はみられない。富山から江戸や京都へ向かう旅人が必要な道中図ということであれば、早くに金沢の三箇屋が出した下通などの道中図で間に合うからである。富山藩医となった道印の弟子永貞の作成した良質な道中図などよりもより優れた道中図を富山の書肆が確保し、出版することも困難であった。こうして、金沢の書肆による出版の重要な特徴となっていた道中図の刊行は、富山の書肆にはみられず、富山の書肆は絵図出版ではほとんど活躍できないことになり、富山や越中の人々が利用する道中図は金沢の書肆や他国の書肆のものに依存することになった。

2, 名古屋

名古屋についてはまず、岸雅裕氏により丹念な調査によりまとめられた名古屋の書肆の出版リスト「江戸時代尾州書林書肆別出版書目収覧」⁽³⁸⁾があるので、これにより書肆刊行の絵図と景観にかかわる図を整理すると次のようになる。

文政6年「東御坊御遷仏御行列之図」高力種信作、菱屋金兵衛・本屋久兵衛刊

天保3年「天保三年琉球人来朝之図」小田切春江作、玉野屋新右衛門ほか2軒、一枚刷

天保8年「関八州與地路程全図」書賈五書堂発兌、江戸須原屋茂兵衛ほか4軒・水戸須原屋安次郎刊、1冊

天保8年「国郡全図」青生元宣作、大坂・京都・江戸の書肆5軒と名古屋永楽屋東四郎刊、2冊

嘉永5年「名古屋御祭礼絵図」作者不明、菱屋刊、一枚刷

年不詳「名古屋東照宮卯月御神事図絵」作者不明、菱屋、1冊

年不詳「若宮祭礼絵図」不明、丸屋伊助、一枚刷

また、明治5年「名古屋県館内蔵板箇所取調書」⁽³⁹⁾によると、永楽屋東四郎は天保7年「美濃国全図」と同年「三河国全図」の出版も知られる。

上で明らかのように、名古屋では絵図関係の出版が少なく、また金沢のような道中図の刊行が知られない。尤も、上の書目収覧によると、絵図とは異なり永楽屋では三都の書肆と相仕で安政4年(1857)に「大日本道中行程細見記」を出し、また玉野屋新右衛門では天保8年(1837)に新刻として「東海道岐蘇路細見道中記」を刊行しており、道中記自体は三都の書肆と相仕にて出版している。この永楽屋は国絵図の刊行も行うなど、絵図関係の出版に力をいていたことがわかるが、国絵図を出せたのが金沢・富山とは異なるところである。

なお、上のリストでは文政の「琉球人来朝之図」もみられるが、これは同使節が名古屋を通行するので出されたものであり、彼らが往来しなかった金沢では無縁の出版物であった。名古屋の書肆は金沢と異なって、重要寺院の祭礼などの行事に関する絵図類も出していたことが確認できるが、これは若干のものであった。

3、信州の城下町ほか

最後に、近世信州の書肆その他による出版物を調査された鈴木俊幸氏と矢羽勝幸氏が整理したリスト⁽⁴⁰⁾から城下町関係の書肆刊行の絵図を取りあげると次のものがある。

寛政3年「善光寺道図」上田板木屋市兵衛

天保6年「信濃国大絵図」池田東籬亭編、松本高美屋甚左衛門と京都本屋2軒、豊物1舗色摺

弘化4年「信濃国大地震之図」、作者不明、大坂・江戸の本屋2軒と善光寺蔦屋伴五郎・上田上野屋三郎助刊) 彩色刷2枚

信州では金沢・名古屋のような大きな城下町はなく、中小大名の城下町ばかりであり、上のように上田と松本の書肆がわずかに刊行しているのかわかるだけである。上田の本屋坂木屋は道中図の「善光寺道絵図」を出しているが、これは全国からの参詣者をえられる善光寺への主要ルートである北国街道の信濃の城下町に所在した書肆であったから可能な出版であったとみられる。尤も、善光寺への道筋となっていた善光寺道自体に位置した松本の書肆は善光寺道の道中図刊行はなく、代わりに相仕で「信濃国大絵図」を出していた。また、上田の本屋上野屋は弘化の善光寺大地震の絵図を江戸・大坂に加えて善光寺の本屋とともに相仕で出版している。善光寺を訪れる人だけではなく、三都の人々にも購入されることを期待して三都の書肆が相仕で災害図の善光寺地震被害図の絵図刊行に加わっていたのが興味深い。当時の人々には大地震は我がことでもある大きな関心事であったので、このような出版が行われたのである。

なお、両氏の調査により、寺社案内図や名所旧跡案内図が信州で多数刊行されていたこともわかるが、その主要なものは善光寺関係の案内図と川中島古戦場案内図、および更級姥捨山の図であった。善光寺領であった門前町善光寺では蔦屋伴五郎など書肆による絵図の刊行が盛んに行われており、善光寺案内図だけではなく、蔦屋は弘化4年「弘化丁未信濃国大地震山皮崩激之図」「弘化丁未信濃国大地震山皮崩激之図」「信濃国大地震之図」(大坂・江戸などの本屋と相仕)も出している。同家は嘉永6年「諸国細見大增補道中独案内図」も江戸書林2軒と相仕で出している。また、善光寺の仁龍堂は年不詳「海陸道中図」(相仕か不明)を出しているが、その

ほかに「文久改正信濃国細見図」も出版しており、また道中記の「名所画入道中記」刊行も知られるように、旅人の多い善光寺の書肆の同家も道中図や道中記の出版に力を入れていた。

なお、この善光寺参詣者が多数往来する北国街道の途中にあった旧跡の川中島合戦場関係では関係村の者(不詳「信州川中嶋合戦陣取略絵図」更級郡北原町、松屋栄助[絵図弘所、休所]、不詳「信州川中島合戦陣取略奪図」更級郡川中島水沢村典庇寺前住)だけではなく、善光寺(不詳「信州川中嶋古蹟順手引車之図」仏都和国屋定之丞発行)や追分宿(不詳「甲越川中島合戦陣取地理細見図」横瀬甚右衛門刊)の者も刊行して販売していた。また、寺社自身による寺社案内図・名所旧跡図の刊行も木曾上松の臨川寺や戸隠山神社、姥捨山放光院、御嶽神社のように盛んにみられた。

終わりに

江戸期には地方の中心都市、城下町にて書肆による出版が盛んに行われていたが、彼らによる絵図の出版はどのようになっていたかを金沢を対象に検討し、明らかになったことを以下にまとめて終わりたい。

金沢の書肆による絵図の出版は、出版活動が盛んであった名古屋の書肆よりも盛況をみたといえる。しかも早くに元禄期から絵図を出すようになっていた。もちろん、中小城下町の隣国信州の城下町などは若干の絵図しかみられず、金沢とは比べものにならない。しかしながら交通路理解でも大切となる国絵図の刊行となると、名古屋や松本のような出版はみられなかった。この点では金沢藩支藩の城下町富山の書肆も金沢と同じであった。

このような金沢では江戸期に城下町絵図の刊行はみられなかった⁽⁴¹⁾。外様大藩の金沢藩が軍事情報ともなる城下の絵図の出版を書肆に容易に認めるわけではなく、藩の規制により金沢城下図の刊行はほとんどできないのが実情であった。金沢藩では城はもちろん武家地の絵図出版は当然に困難であった。これに対して町方に限られた絵図の刊行ならば藩も認可しようが、この金沢は名所地・観光地や参拝者を集める門前町でもないため、旅人などの需要に限界があった。結局、金沢では寺社案内図や遊所案内図は寺社や遊所の茶屋などが出すことになり、書肆

によるものは極めて限られることになった。

このように金沢の書肆による絵図出版は様々な絵図を対象としたものではなく、道中絵図を主な対象としたもので、そして前記のように元禄期という比較的早い時期より刊行が行われたという点に特徴がみられた。ただ、それは特定の書肆により行なわれたもので、具体的には三箇屋五郎兵衛という本屋がこの絵図出版に乗り出して始まり、同家の活動期には同家のみが絵図の刊行を行うという限界もあった。享保期以降に同家の絵図刊行がみられなくなると、金沢の書肆による絵図出版は中絶することになったが、しかし寛政・享和期以降に再び複数の書肆により刊行されるようになる。もっとも、この書肆の絵図刊行は三箇屋のように多数の絵図を出すのではなく、いずれも一点ずつの出版という限界があった。なお、三箇屋の絵図刊行が中断していた時期には、永貞の下通道中図の写本などが代わりに旅人らに利用されていたことになる。

金沢の書肆が出した絵図のほとんどは道中図であったが、これらは旅に持参できる一枚刷の折り畳式や懐中に入れられる大きさの折本の携帯可能なものであった。名古屋や松本・富山などは主要街道の途中に位置したためか、道中図の出版はみられなかったもので、金沢の書肆による道中図出版はより特徴的であったといえる。

三箇屋はこの道中図を早くも元禄期に刊行していたが、これは多数の武家や町人らが役務や商用で大坂・京都への旅を行い、しかも早くに参宮や本願寺・西国霊場への旅を盛んに行うようになり、金沢でのこの需要が大きかったためである。また、元禄に続く宝永期には金沢・江戸間の道中図を同家は刊行しているが、これも参勤交代で江戸間を上下する多数の藩士の需要があったためである。このため以後も江戸間の道中図が幕末まで書肆により刊行されるが、その主は越後・信州を回る下通、下街道の北陸街道廻りの道中図であった。金沢藩の参勤交代はこの下通を多く利用し、一部に越前・近江から中山道や東海道へ回る上通、上街道利用も行われたので、一部に東海道廻りの道中図の刊行もみられた。なお、寛政・享和以降の時期に再び道中図が出版されるようになったが、これはいうまでもなくこの時期に増加していった旅人の増加を背景に持つものである。

元禄期に刊行された道中図は、金沢の書肆の三箇屋が新たに作成したものではなかった。それは京都

の書肆が刊行した絵図を利用して、金沢を中心にして描き直して出したものであり、出版のみが三箇屋によるものとみられる。これに続いて宝永期に刊行された江戸への下通の道中図も江戸の書肆の道中図を下敷きにしていた。ところが、京都や江戸の本屋作成の道中図を下敷きにした道中図刊行から金沢の書肆は、早くも正徳期には抜け出せた。この正徳2年に三箇屋から出版された下通の道中図に、地元の方が作成した絵図が使用されたのである。すなわち、当時の金沢藩には元禄時代の代表的絵図作者・測量家で、江戸や東海道の正確な絵図を刊行していた藤井半智こと遠近道印の弟子であった兵学者の有沢永貞がおり、彼が作成した道中図が刊行されたのである。彼は道印の弟子であったために、距離や方位を正確に測量し、これを紙面にも正確に表現する分間絵図を下通の道中図で作成し、三箇屋から刊行したのである。道印作成の東海道の分間絵図以外では全国でも初めて出版された分間絵図の道中図であった。しかも、すべて彼は師の作図法に従ったわけではなく、諸所に方位を記載するのを略し、また利用者に金沢藩士が多いことを考慮してか、名所よりも古城の記載に重点を置いたりしている。

永貞のものよりすぐれた道中図は作成しがたかったためか、三箇屋が出版をやめてからも需要の多い下通の道中図に関してはほとんど永貞の分間絵図を元にした分間絵図が作成されている。しかし、さすがに幕末になると新たな作者により、縮尺を変えた分間絵図が作成され、刊行されることになった。これまでの永貞本の焼き直しでは本屋も刊行しかねたとみられ、内容的に大枠を永貞のものを参考にしてはいるが、旅人らの需要に応えるために名所記載を詳しくした新しい点があった。

註

- (1) 中村幸彦「近世地方版研究の提唱」『長澤先生古希記念図書学論集』（三省堂・1973年）など。書肆の絵図刊行については、城下町外の吉海直人「『絵図屋庄八』について」（『同志社女子大学学術研究年報』44-4号・1993年）・鈴木良明「鎌倉絵図と在地出版」（『近世仏教と勸化』岩田書院・1996年）がみられるが、これまでの書肆などによる出版研究文献の詳細なリストは鈴木俊幸『増補改訂、近世書籍研究文献目録』（ペリカン社・2007年）が作成されてい

るので参照のこと。

- (2) うんのかずたか(海野一隆)『ちずのしわ』(雄松堂出版・1985年)157-172頁。なお、刊行された道中図自体については、木下良「交通関係の古地図」(別冊歴史読本『江戸時代「古地図」総覧・新人物往来社・1997年)、今井金吾「旅とともに発展した道中図」(別冊歴史読本『江戸時代「古地図」総覧』)などが取り上げるが、手書きも含めた道中図については深井『図翁遠近道印』(桂書房・1990年)や山本光正『街道絵図の成立と展開』(臨川書店・2006年)も検討している。
- (3) 大和博幸「地方書肆の基礎的考察」(浅倉治彦・大和博幸編『近世地方出版の研究』東京堂出版・1991年)
- (4) 名古屋については岸雅裕編「江戸時代尾州書林書肆別出版書目収覧」(『尾張の書林と出版』(青堂堂書店・2009年)と「翻刻 明治5年『名古屋縣管内蔵版箇所取調書』」(前同所収)。信濃の刊行絵図については鈴木俊幸代表『近世信濃における書籍・摺物の文化についての総合的研究』(鈴木俊幸刊・2001年, 科学研究費基盤研究 c (2) 成果報告書)の詳細な書籍・摺物調査リストと矢羽勝幸「近世信濃の出版目録・越後・佐渡俳書出版年表」(浅倉治彦・大和博幸編『近世地方出版の研究』東京堂出版・1991年)。
- (5) 竹松幸香「近世金沢の出版」(『地方史研究』269号・1997年)・竹松幸香「『近世金沢の出版物一覧』について」(『市史かなざわ』9号・2003年)。竹松幸香「出版」(『金沢市史』資料編学芸編(金沢市編刊・2001年))

なお、近年建築史研究者による「城下町金沢学術研究会」の共同研究が実施されて、その報告書が出された。その第一巻が宮本雅明氏の『城下町金沢学術研究』第一(金沢市・2013年刊)である。これは金沢を対象に日本の近世城下町の成立を論じたものであるが、金沢を事例に一挙に日本の中に位置づける検討が行われている。しかし、金沢など個別事例を対象にした場合、その城下町の地域的特徴を検討したうえでないと不十分であり、この観点から北陸城下町成立の特徴をかつて『近世地方都市の成立と町人』(吉川弘文館・1997年)で論じている。

- (6) 一枚刷りの刷物ということになると瓦版・番付・引札など膨大なものとなるが、対象が絵図や絵図に類似した景観図ということになると、城下町の出版では対象数が少なくなるために、金沢の書肆など金沢関係者が板行したものは限定されるので、これらもほとんど確認できた。すなわち、石川県立博物館には膨大な刷物の大鋸コレクションなど一枚物・刷物が多数所蔵され、この委しい目録『大鋸コレクション目録刷物編』(石川県立郷土資料館編刊・1985年)なども作成されている。大鋸コレクションの刷物は引札795点・番付570点・双六171点・錦絵105点・名所旧跡図250点・刷物瓦版23点に分類されている。同館以外では金沢市近世史料館の諸文庫や寄贈・購入郷土資料にも刷物は多数収蔵され、絵図関係は同館の絵図目録(金沢市立図書館監修・刊『金沢市立図書館所蔵絵図・地図目録』1990年)にて整理されている。これらの刷物は近世に出された金沢の書肆などの一枚刷りの絵図や寺社境内図などがあるが、そのほとんどは明治以降に作成されたものである。つまり大鋸コレクションと近世史料館に架蔵されたもので全部は完全に把握できないという限界はあるものの、江戸期金沢の書肆による出版物ということであれば、他に存在するものは明治以降のものとなり、江戸期のもののほぼその全容をつかめることになる。
- (7) 富山市教育委員会編刊『富山市収蔵絵紙・地図類収蔵目録』I, 1986年。なお、富山の出版物の研究には村上清造『富山県印刷史』(富山県印刷工業組合・1981年)などがあるが、一枚物については絵画類について売薬版画の研究が行われ、坂森幹浩「富山売薬版画の概観」(富山市教育委員会編刊『明治の売薬版画』1997年)・坂森「江戸期における売薬版画の展開」(富山市教育委員会編刊『富山の刷り物』1997年)、加藤達行「売薬版画の利用とその展開」(地方史研究協議会編『情報と物流の日本史』雄山閣出版・1998年)などがある。寺社案内図については立山の芦峯寺・岩峯寺の衆徒が出した山絵についての研究が行われている(立山カルデラ砂防博物館編刊『立山登山案内図と立山カルデラ』2000年)。
- (8) (15) 国立公文書館蔵内閣文庫「日本輿地図」

の「越中国立山絵」。これは、数多く残されている立山禅定絵図の中でも、各所に里程が記載されている特徴があり、このため三箇屋絵図の写の可能性がある。

- (9) 日置謙『改訂増補 加能郷土辞彙』北国新聞社・1956年
- (10) 石川県立博物館編刊『景勝をめぐるいしかわの景観史』2010年、版43-50参照。
- (11) 石川県立郷土資料館編刊『大鋸コレクション展』1972年、図版・38・39頁
- (12) (16) (17) (20) 殿田良作「書肆三箇屋」(石川郷土史学会編『文化点描』石川県図書館協会刊・1955年
- (13) 神戸市立博物館蔵南波松太郎旧蔵(中村拓『古地図大成』講談社・1974年、119番写真)。『古地図大成』の海野一隆「海陸道中図」の解説によると、この天和の絵図は江戸の鱗形屋孫兵衛刊行のもので、実際に現存するのはその後再刊された孫兵衛原板のものである。今井金吾「旅とともに発展した道中図」(前注2参照)によると、この現存本は実際には安永・天明に改訂されたもので、現存最古の一枚物の道中図ということになるという。いずれにしても三都外の本屋の絵図出版としては早い時期のものであり、しかも東海道とは別の広域の道中図としては天和の絵図に次ぐものとなる。問題はこの絵図の元にした絵図であるが、これについては、次項で取りあげる。
- (14) この元禄時代には若者の通過儀礼的意味合いを持つ伊勢参りが越中の農村でも行われるようになっていたことは深井「元禄・享保期の真宗地帯、越中における若者の参宮ー氷見地域について」(『富山大学人間発達科学部紀要』6巻1号・2011年)参照
- (18) (28)「乙未の春旅」(高山彦九郎先生遺徳顕彰会編『高山彦九郎全集』博文館・1943年)
- (19) (21) (25) 前注5 竹松幸香「出版」(『金沢市史』資料編学芸編)の「表2 金沢の本屋及び営業期間一覧」を参照
- (22) (23) (26) 竹松幸香「『近世金沢の出版物一覧』について」(『市史かなざわ』9号)の「改訂金沢の出版物一覧」表参照。
- (24) 富山県立図書館・富山市郷土博物館・石川県立博物館ほか。

- (27) 前注5 竹松幸香「近世金沢の出版」(『地方史研究』269号)を参照
- (29) 両絵図は中村拓編『日本古地図大成』(講談社・1974年)の解説、海野一隆「東海道分間図」参照。
- (30) 海野一隆『ちずのしわ』(前注2参照)
- (31) 前注2, 今井金吾「旅とともに発展した道中図」参照
- (32) 石川県立図書館蔵森田文庫
- (33) 前注12殿田良作「書肆三箇屋」参照
- (34) 深井『図翁遠近道印』(前注2)Ⅱ章4節
- (35) 兼子心「富山の刷りものについて」(富山市教育委員会編刊『富山の刷り物』1997年)
- (36) 売薬版画については坂森幹浩「富山売薬版画の概観」(富山市教育委員会編刊『明治の売薬版画』1997年)・坂森「江戸期における売薬版画の展開」(前注35『富山の刷り物』), 加藤達行「売薬版画の利用とその展開」(地方史研究協議会編『情報と物流の日本史』雄山閣出版・1998年)など
- (37) 立山カルデラ砂防博物館編刊『立山登山案内図と立山カルデラ』(2000年)
- (38) (39) 前注4 岸雅裕『尾張の書林と出版』所収
- (40) 前注4, 鈴木俊幸代表『近世信濃における書籍・摺物の文化についての総合的研究』と矢羽勝幸「近世信濃の出版目録・越後・佐渡俳書出版年表」
- (41) 寺社版とされる「金沢地図」が明治初年に刊行されるが、これは金沢内の町名など記載しないものであった。

追記、本稿は前田藩領社会の絵図作成者と絵図についてこれまで取り組んで来た研究の一環としてまとめたものである。直接には『金沢市史』絵図地図編に参加し、街道図と町方図を担当し、実施した金沢の書肆が出した絵図を初めとする関係絵図の調査や、その後に従事した『氷見市史』の絵図・地図編編纂にて、金沢藩領にかかわる絵図の調査にも依拠している。お世話になった関係者や資料所蔵機関に御礼申し上げたい。

(2013年10月21日受付)

(2013年12月11日受理)

巻末表、金沢書肆による刊行絵図一覧

番号, 刊行年, 絵図表題, 作者名, 書肆名 [活動期] / 印刷形態, 彩色有無, 形態 (寸法) / 所蔵 (収蔵機関), [分類] (備考)
1, (元禄15年以前)「(金沢ヨリ伊勢大和廻り之図)」, 作者不名, 三箇屋五郎兵衛 [元禄一寛政期] / 木版, 彩色, 折疊一枚刷り (31×72匁) / 大友家旧蔵 (金沢市立玉川図書館近世史料館) [道中図]
2, 元禄15年, 「金沢ヨリ伊勢大和廻り之図 高野和歌浦須磨明石播州名所京都へ東西近江路之図」作者不名, 三箇屋五郎兵衛 [元禄一寛政期] / 木版, 彩色, 折疊一枚刷 (30×120匁) / 尊経閣文庫 (前田育徳会) [道中図] (「賀州至京師兩道置郵図」が外題, 前田綱紀命名。同図は京都大学付属図書館谷村文庫・名古屋市立博物館も所蔵)
3, 宝永5年「從加州金沢至武州江戸道中記」作者不明, 三箇屋五郎兵衛 [元禄一寛政期] / 木版, 無彩色。部分朱印あり, 折本 (16×13匁) / 森田文庫 (石川県立図書館) [道中図]
4, 正徳2年, 「從加州金沢至武州江戸下通山川駈路之図」梧井庵有沢永貞作, 三箇屋五郎兵衛 [元禄一寛政期] / 木版, 無彩色, 折本, (21×10匁) / 金沢市立玉川図書館近世史料館, [道中図] (他に石川県立歴史博物館大鋸コレクション本など)
5, (正徳5年以前)「金沢ヨリ中仙道東海道図」作者不明, 三箇屋五郎兵衛 [元禄一寛政期] / 木版か, 彩色不明, 形態不明 / 未発見 [道中図] (金沢市立玉川図書館近世史料館蔵「六葉集」に記載)
6, (正徳5年前)「立山禅定之図」, 作者不明, 三箇屋五郎兵衛 [元禄一寛政期], 木版か, 彩色不明, 一枚刷り / 未発見 [寺社参詣図] (国立公文書館内閣文庫蔵「日本輿地図」の「越中国立山絵」は写か)
7, (享保4年以前)「金沢ヨリ伊勢大和廻り之図 高野和歌浦須磨明石播州名所京都へ東西近江路之図 (北国道中図)」作者不明, 三箇屋五郎兵衛 [元禄一寛政期] / 木版, 部分彩色, 一枚刷り折疊 (30×116匁) / 大友家旧蔵 (金沢市立玉川図書館近世史料館) [道中図]
8, 享保4年「新改正 金沢ヨリ伊勢大和廻り之図 高野和歌浦須磨明石播州名所京都へ東西近江路之図」作者不明, 三箇屋五郎兵衛 [元禄一寛政期] / 木版, 彩色, 一枚刷り折疊 (29×119匁) / 三井文庫 [道中図] (他に谷村文庫蔵 (京都大学付属図書館)・山下氏旧蔵本 (岐阜県立図書館))
9, 不詳「新板江戸道中細見図」作者不明, 塩屋与三兵衛 [寛政一天保期] / 木版, 無彩色, 折本 (19匁×8匁) / 金沢市立玉川図書館近世史料館 [道中図] (他に東京都立中央図書館蔵本)
10, 不詳, 「從金沢至江戸道中駈路山川之図」作者不明, 八尾屋喜兵衛 [文化一万延期] / 木版, 無彩色, 折本 (15.5匁×6.6匁) / 大鋸コレクション (石川県立歴史博物館) [道中図] (表題は「金沢江戸道中駈次山水 (ママ) 之図」)
11, 不詳, 「金沢江戸間道中図」作者不明, 能登屋次右衛門 [不明] / 未確認, 木版, 折本 / 中山家文書 [道中図] (金沢市立玉川図書館近世史料館蔵マイクロカメラ写真版によるため彩色未確認)
12, 嘉永元年「金沢西御坊御遷仏掾儀略図」作者不名, 弘所上堤町松浦善助・八兵衛, 他2名 / 木版, 2色刷り, 一枚刷り (51.2×35.0匁) / 大鋸コレクション (石川県立歴史博物館) [寺社行事案内図]
13, 安政6年「金城北国往還道中図」作者不明, 石田太左衛門 [安政一慶応期] / 無彩色, 木版, 折本 (16匁×8匁) / 金沢市立玉川図書館近世史料館 [道中図]
14, (慶応3年)「東新地絵図」庫敬, 近廣堂 [安政一慶応期] / 木版, 彩色, 一枚刷り (38匁×51匁) / 金沢市立玉川図書館近世史料館 [遊所図]

参考

- 文化12年「加賀国河内庄鳳凰山形勝図」津田鳳卿探勝・金子斐 (有斐) 絵, 板元不詳 / 木版, 無彩色, 一枚刷り (33×45匁) / 大友家旧蔵 (金沢市立玉川図書館近世史料館) [名所風景画]
- 安政5年「駈路之鈴」遠藤数馬, 取次鳶虎右衛門 / 木版, 無彩色, 折本 (23匁×9匁) / 金沢市立玉川図書館近世史料館 [道中図]
- 元治2年「金沢御坊一切経入藏式 略図」作者不詳, 板元不詳 / 木版, 無彩色, 一枚刷り (34.2匁×50.8匁) / 大鋸コレクション (石川県立歴史博物館) [寺社行事案内図]
- 慶応3年「西新地絵図」応需口游, 板元不詳 / 木板, 彩色, 一枚刷り (38匁×51匁) / 金沢市立玉川図書館近世史料館 [遊所図]
- ①, 不詳 [金沢・大坂間道中図] 扇面, 作者不詳, 片町炭屋与吉板 / 木版, 彩色, 一枚刷り (22匁×48匁) 富田文庫 (金沢市立玉川図書館近世史料館) [道中図]
- ②, 不詳 [金沢・江戸間下通道中図] 扇面, 作者不詳, 片町炭屋与吉 / 木版, 彩色, 一枚刷り (22匁×48匁) 富田文庫 (金沢市立玉川図書館近世史料館) [道中図]
- 不詳「犀川河上新町芝居座絵図」作者不詳, 板元不詳 / 木板, 一枚刷り (28.3×41) 石川県立歴史博物館 [遊所図]
- 不詳「新板手擲清水参并白山詣双六」, 作者不詳, 板元不詳 / 木版, 無彩色, 一枚刷り (50.5×32.9) / 大鋸コレクション (石川県立歴史博物館) [道中双六]
- 不詳「加州大乘寺之絵図」不詳, 板元不詳 / 木版, 無彩色, 一枚刷り (51匁×34匁), 金沢市立玉川図書館近世史料館 [寺社案内図]